P-16

『PHOBIA (2009)』の表現病理

新潟医療福祉大学　渡邉良弘

【背景と方法】

現代の精神医学において統合失調症は主に診断学的見地から，幻覚や妄想、認知行動心理学的側面が強調されがちである．一方で患者の体験する強度については十分に解明されているとは言いがたい．統合失調症発症は人生において「大きな出来事」である。その持続や強度からみて幻覚や妄想の比ではない統合失調症の「恐怖」について、ヴァッソスの画集を表現病理学的に論じ、ひいては人生のなかで「大きな出来事」に見まわれた者の苦悩の理解に寄与したい.

米国の Art Deco の代表的画家であるヴァッソス(John Vassos,1898-1985)はギリシャに生まれ,コンスタンチノープルで育ち 16 歳で英国に移住した．21 歳（1919）に米国に移民し，1924 年にニューヨークでスタジオをもった．ヴァッソスは生涯の幸運として 26 歳（1924）で結婚したことと精神科医 H.S.サリヴァンと出会ったことを挙げている．ヴァッソスは長命を得て米 RCA 社でデザインにたずさわり The Industrial Designers Society of America (IDSA)の発足に関わった.

【結果と考察】

ヴァッソスは予後のよい統合失調症であった．現代であれば早期精神病の診断かもしれず未詳の部分が多い．ただ、幾つで発症したかはサリヴァンの伝記（1982）からも不明である．画集”Phobia”は 33 歳（1931）の作品である。の冒頭には元主治医であり友人でもあったサリヴァンへの献辞が記されており，同画集は描画の開始から完成，出版までサリヴァンの承認を得ている。サリヴァンはヴァッソスの描画が臨床の専門家が知る精神病理学理論の領域にまで達していると論じた．いわゆる Art Bru や「アウトサイダー・アート」と一線を画すものであり適切な治療関与がうかがえる.

ヴァッソスは、画集”Phobia”を世にだした目的として，疾病体験の理解を助け，今後恐怖がわきおこる者へ基礎的な事実を示唆したいがためと説明している．また，恐怖とは本来視覚的なものであり，身体に起きたことをリアルな絵として思い描くことができる，という重要な指摘を記している.

作品名から連想されるがちな神経症水準の恐怖症心性でなく,非現実的でより重篤な事態を表現したものである.また,病的体験をくぐりぬけた者には現実として近しく感じられるものであると指摘している.ヴァッソスの画集は,美学的価値以外にも精神病，統合失調症の不安や恐怖を示しており重要な位置にあるといえる.

画集”Phobia”の表現病理について論じることとしたい.

（1）作品ＸⅢ　“Agolaphobia”の表現病理

Agolaphobia は「広場恐怖」という表題であるが描画は地面がめくれ上がりあたかも津波の如く数mの高さから男性を圧倒しようとするありさまが描かれている.地面のめくれ上がりは中心化体験、図と地の逆転、現実すべてから被圧倒である．小さく描かれた人物はなすすべもなく慄いた姿勢を示している．ヴァッソスの解説によると Agolaphobia とは出生前に遡行する体験であり、出生以前の心の安全と平和が引き裂かれる体験であるという。人物はこれまで遭遇したこともない名づけようもない恐怖を目の当たりにする孤独な場所に放擲されている。作品は妄想気分や緊迫困惑、知覚変容をよくあらわしている。被圧倒体験、あるいは言語を絶する圧倒は急性期を経た後の患者からよく聴かれる疾病体験である。

（2）作品ＸＸⅢ　Pantophobia の表現病理

最も統合失調症親和的なの作品 XXⅢ“Pantophobia”であろう.作品には裸形の男性が中心に描かれ台風の目のような渦巻きから顔を半分だしているように描かれている．渦巻きには四方に散らばりつつある男性像が 12 人小さく描かれている．ヴァッソスは「Pantophobia はすべての恐怖である．生きる欲望は消えうせ，犠牲者は脅威になり，理解できない力で振りまわされ，渦を巻きながら，望みと恐怖が共在する言語を絶した解体にいたる.簡単なことを決めるのも深く苦痛なことである.すべての自我､すべての人格は痕跡を残さず消滅してしまう.生きることは恐怖そのものでみたされる.ついに緊張病状態になり，起きあがることもできず，生きつづけることの露骨に拒絶にあたる，無意識に自らに課した状態にいたるのである」と述べている.急性期には自己そのものが融解ないし消滅し，それは自他境界の消滅とも表現される．また自分が生きているのか死んでいるのか判別できなくなる.このことは，恐怖が生きうる限りの極限まで至り、このことにより恐怖と分かちがたく関連する身体感覚が無化していると説明されよう.中井(1998, 2009)は「統合失調症体験のもっとも強烈なものは恐怖である．それゆえに、うかうか人に漏らさないという機微がありうる」と指摘し発症期における特有の恐怖のありようを考察している.統合失調症の恐怖はサリヴァン（1949, 1952）が最初に強調したものである.発症後の急性期および急性期後に恐怖が発作ないし一定期間持続する症状として現れると渡邉（1998）も指摘してている。

（3）結びにかえて

ヴァッソスは友人の科学者たちが知らないうちに精神病理の専門領域に入り込んでいたこと，天賦の才能を持つ者がいわゆる正常心理から時に異常心理に跳躍しがちであること，しかし，そうすることにより絵画制作に身震いするほどの想像力がもたらされると述べている.画集”Phobia”ほど身体感覚にねざした恐怖のありようを如実に示した統合失調症親和的な作品は現在までのところ稀有であり，ヴァッソスの一連の作品について今後も検討を重ねていきたい.